



永世中立国スイスと国際関係

220781107 張間美玖

はじめに

- ・ **金融危機の連鎖とスイス金融システムの再編**

スイスの金融大手クレディ・スイスの経営危機へと発展
同行は歴史的な不祥事の影響で再建中で、SNSでの悪評から預金流出が加速

- ・ **日瑞金利逆転と為替トレンドの転換**

日本の政策金利が約2年半ぶりにスイスの水準を超過
主要先進国で最低の地位を脱却

はじめに

安全資産としてのスイスフランへの一極集中

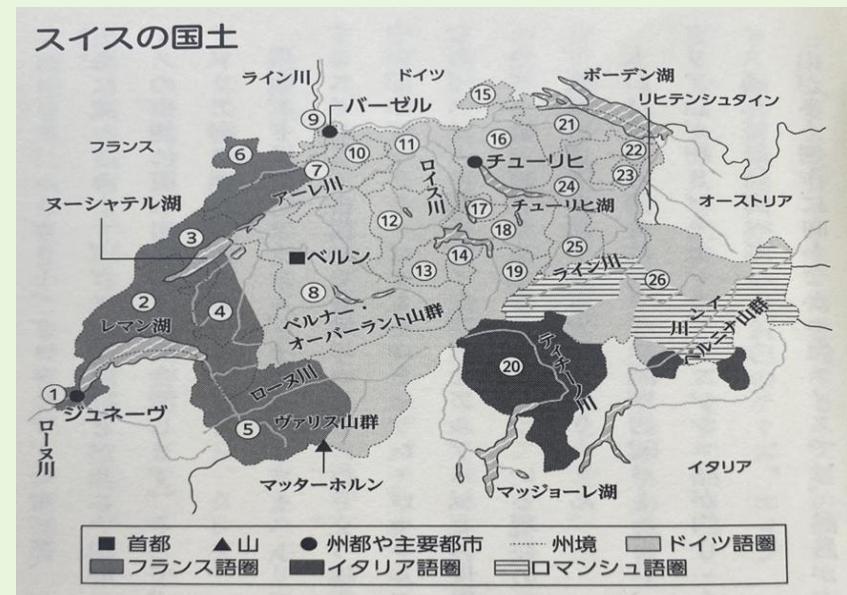
外国為替市場で、スイスフランの対円相場は
1スイスフラン=186円台に到達、年初来高値を更新
とともに「安全資産」の両通貨だが、現在はスイスフラン
の優位性が鮮明

本稿では、、、

スイスの歴史とスイスの諸問題を多角的な視点から分析

第1章 スイスの歩み <第1節 スイスの概要>

- ・スイスはヨーロッパの中心でフランス、西ドイツ、オーストリア、イタリアと国境を接続
- ・**政治的には共和国**
→永世中立国として認知
他国との軍事的同盟は非提携の立場
- ・スイスの地形は、北西のジュラ山脈地帯、中央部のスイス高原、そして南部および東部のアルプス山脈地帯の3つ大別
- ・人口：約900万人（そのうちの4分の1が外国人）
- ・面積：4万1000平方キロメートル



第1章 スイスの歩み <第1節 スイスの概要>

<山岳地域の気候>

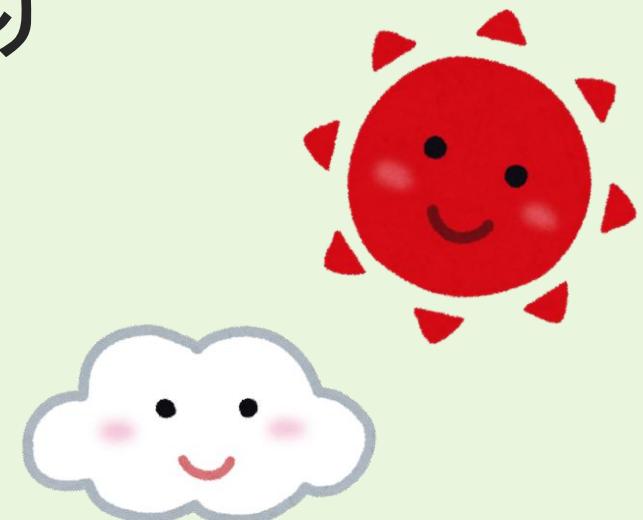
冬は非常に冷寒で夏は比較的涼しい

スイス高原では四季が比較的はっきり

⇒農業が盛ん

<南部のティチーノ州など>

イタリアに近いため、温暖な気候



第1章 スイスの歩み <第1節 スイスの概要>

- スイスは**水資源**が豊富⇒水力発電が盛ん
電力供給の中で、水力発電の割合は非常に高い
⇒再生可能エネルギーの中心
- スイスは多言語国家
公用語はドイツ語、フランス語、イタリア語、
ロマンシュ語の4言語
- スイスは**連邦制国家**⇒26の**カントン（州）** がそれぞれ
強い自治権を保有

第1章 スイスの歩み <第2節 スイスの政治と経済>

『近代民主政治』 By ジェームズ・ブラウス

⇒ 「真に民主政治たる近代の民主国家の中に
あって、研究されるべき最高の資格を有す
るもののはスイスである」

「コンコルダンツ・デモクラティ（調和民主制）」

⇒ スイスの政治体制の最大の特徴

第1章 スイスの歩み <第2節 スイスの政治と経済>

「ミリツツシステム」

- ・スイスの政治行政における特徴のひとつ
- ・一般市民の副業的・名誉職的に公共の任務の担当制度
軍隊・議会・行政など多くの分野へ
- ・スイスの「自治行政」の中核的要素

一方で、、

近年では専門性不足や複雑化の行政への対応の難しさが顕著
とくに連邦レベルでは制度の限界も

第1章 スイスの歩み <第3節 スイスの建国と中立>

「永久同盟」

1291年、スイス中東部の森林三邦、ウーリ・シュヴィーツ・ウンターヴァルデンが同盟を締結
⇒ のちに「誓約同盟」と呼称

個々の邦の自治権拡大の歴史がスイスの中・近世史

ハプスブルク家、サヴォイ家 vs チューリヒ、ベルン
自治権拡大のための戦闘
⇒ 13世紀以後、両家の支配の弱体化

第1章 スイスの歩み <第3節 スイスの建国と中立>

「八邦同盟」

軍事同盟の発展⇒14世紀半ばまでに、ルツェルン・チューリヒ・ツーク・グラールス・ベルンの諸邦が加入

ハプスブルク家との闘いに勝利⇒15世紀末～16世紀初頭にゾロトゥルン・フリブール・バーゼル・シャフハウゼン・アペンツェルの五邦が加入⇒誓約同盟は13邦に

1370年 パッフェン協定：初の共同で同盟内部の秩序維持向上の規定が決定

1393年 センパッハ協定：誓約同盟は、独立主権保有諸邦の集合体

第2章 2つの世界大戦から80年代

＜第1節 二度の世界大戦とスイスの中立政策＞

＜19世紀後半の世界＞

イギリス、フランス、ドイツ、イタリア、ロシアなどの列強が領土拡大と植民地獲得を競合⇒帝国主義の時代

＜20世紀初頭の世界＞

列強は複雑な同盟関係を確立

イギリスはフランス・ロシアと三国協商を締結、ドイツはオーストリア・ハンガリー帝国やオスマン帝国と接近⇒中央同盟を形成

第2章 2つの世界大戦から80年代 <第1節 二度の世界大戦とスイスの中立政策>

◎1914年6月 サラエボ事件

オーストリア皇太子夫妻のセルビア人の暗殺事件

⇒列強諸国の連鎖的な参戦の開始で第一次世界大戦が勃発

<point>

- ・スイスは中立を宣言
- ・同年8月に議会はウルリヒ・ヴィレ将軍を最高司令官に任命
しかし、彼は親ドイツ派のため特にフランス語圏住民の間では強い反発が勃発
- ・戦争中、スイスは中立国としての立場を利用
協商国と中央同盟の双方に農産物や工業製品を輸出
⇒経済的利益を獲得

第2章 2つの世界大戦から80年代 <第1節 二度の世界大戦とスイスの中立政策>

◎ 1920年5月 スイスの国際連盟加盟が認定

国民投票の42万票対32万票で可決

◎ 1939年9月 第二次世界大戦 勃発

スイスはファシズム諸国と国際連盟の仲介⇒慎重な外交

スイスは1936年にエチオピア侵略を、38年にドイツのオーストリア併合を承認

対立の妥協⇒国際連盟の制裁行動には非参加の「絶対中立」の立場に

第2章 2つの世界大戦から80年代 ＜第2節 戦後のスイスの政治と経済＞

第二次世界大戦後、1945年10月に国際連合が設立
⇒スイスの難民の受入の消極的さや、民間企業のナチス・ドイツとの取引関係が批判

スイスの国際社会に役立つ多くの国際機関

「世界保健機関（WHO）」、「国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）」はスイス・ジュネーブに本部を設置。
また、国際電気通信連合（ITU）や万国郵便連合（UPU）もスイスに本部を設置⇒“世界における自由主義圏の一翼を担う国”で国際社会に貢献。

第2章 2つの世界大戦から80年代 ＜第2節 戦後のスイスの政治と経済＞

◎ 「栄光の30年」

終戦後、経済的繁栄の時代に。

この時期、周辺諸国は戦争で経済インフラに甚大な被害

⇒スイスは、早急な復興と成長で資本主義体制における「黄金期」へと突入。（背景：国内産業の成長 労働力の需要拡大など）

スイス移民政策：特に1950年代～1960年代、イタリア人をはじめスペイン人、ポルトガル人などの南欧諸国からの労働者で移民人口は急増。1961年には年間10万人超の移民がスイスに入国
⇒移民の大量流入は社会的・政治的にも大きな影響が。

第2章 2つの世界大戦から80年代 <第3節 60～70年代のスイス>

「ミラージュ事件」

1961年にフランスからミラージュ戦闘機導入の計画が進捗
予算が当初の8億7000万 Franc から3年後には6億 Franc の追加
が必要なまでに膨張。⇒政府への不信感が蓄積

スイス史上初の両院合同調査委員会の設置の事態

第2章 2つの世界大戦から80年代 <第3節 60～70年代のスイス>

<1970年代前半>

スイス経済は石油危機で深刻な被害

インフレと失業の進行で、時計産業などの伝統産業が大きく衰退

1979年の国民議会選挙では投票率が史上最低を記録。社会民主党も議席を減少し自由民主党と同じ結果に

このように、60～70年代のスイスは、安定の裏に制度的硬直と政治的停滞で、社会や地域の不満が徐々に表面化

第3章 スイスのグローバル化 <第1節 多言語国家としてのアイデンティティ>

スイスのナショナル・アイデンティティは、「言語的基盤」と「非言語的象徴」の二重構造で成立
⇒スイスの多言語共存や独自の教育政策の制度的背景

多言語のスイスは近代国家の境界規定のはるか以前に開始
この歴史的な言語的モザイクこそが、スイスのナショナル・アイデンティティの根幹を形成。

スイス国民がこの言語問題に敏感なため、近代国家の成立後、この多言語性は制度的に保障

第3章 スイスのグローバル化

＜第1節 多言語国家としてのアイデンティティ＞

ナショナル・アイデンティティのもう一つの核は、「**旧盟約者団の一員であること**」の歴史像。
特に肯定的なコノテーション（農民性,農民）と関連

教育は、ナショナル・アイデンティティを次世代に伝達可能な
最も重要な公的機関
しかし、スイスでは連邦憲法上の原則で、单一の集権的な言語教
育カリキュラムの強制は基本的に許容

第3章 スイスのグローバル化 <第2節 スイスの移民問題>

スイスの移民・難民問題および外国人の統合問題は、カントンが
強い自治権を保持
地方分権という政治体制で複雑化

スイスの直接民主主義の根幹、レファレンダム（国民投票）やイ
ニシアティヴ（国民発議）には、カントン票が存在
⇒国民投票の可決には、国民とカントンの「二重の賛成」が必要

第3章 スイスのグローバル化 ＜第2節 スイスの移民問題＞

＜1990年代後半以降＞

保守右派政党：スイス国民党 (SVP)

⇒難民流入や外国人の割合に制限を設置のためのイニシアティヴ
が頻繁に発生

2016年：EUの難民の受入が減少

⇒スイスの難民申請者数は約30パーセント減少

第3章 スイスのグローバル化 ＜第3節 スイス産業の発展＞

スイスでは、
誰でも手軽に本格的な省エネライフを実現可能
エネルギー効率なシステムが整備済
例：再生可能な暖房・給湯設備、カーシェアリング網など

1991年：「エネルギー2000」のプログラムが始動
この10年間の行動計画では、再生可能エネルギーの生産量を増大
目標が設定

第3章 スイスのグローバル化 ＜第3節 スイス産業の発展＞

＜自治体が関与するエネルギー関連業務＞

上下水道、ゴミ処理、地域暖房、公共施設、交通網、土地利用、市営エネルギー会社の運営など

→国のエネルギー庁も、自治体の役割の大きさを認識
持続可能な行動へと誘導

中でも本格的な政策の展開⇒「エネルギー都市」認証の自治体

第4章 スイスの外交関係

＜第1節 日本とスイス＞

スイスと日本の協力関係

国交樹立から160年で、初期の時計職人や貿易商の
パイオニア精神に定着。今まで活発に維持

経済面では、スイスは現在対日投資額で第8位

日本にとってスイスは第9位の投資先

特にスイスの優れたイノベーション・エコシステムが日本の投資
家から注目

⇒二国間自由貿易協定（FTA）の存在が強固に支援

第4章 スイスの外交関係

＜第1節 日本とスイス＞

さらに、スイスと日本は、2023年～2024年の国連安全保障理事会（安保理）の非常任理事国の任を共に担当
⇒安保理の効率性と実効性の向上を追求

日瑞協力関係は、経済・科学技術分野での利益追求の超越展開
以上に、温暖化や高齢化などの地球規模の課題解決貢献に未来志向の関係として、その重要性を認識

第4章 スイスの外交関係

＜第2節 EUとスイス＞

スイス連邦のEU加盟への姿勢 ⇒ 1997年と2001年に国民投票で求
EU加盟交渉の国民発議がいずれも圧倒的多数で否決の事実に象徴
⇒ この否決の背景には大きな地域差が存在

反対論が根強いのは、既存のFTAが一定の成功の達成が
加盟賛成論に歯止めの原因

自由民主党などは中間的な立場でFTAの継続の懇願
一方、社会民主党や緑の党はEU加盟に賛成

第4章 スイスの外交関係

＜第2節 EUとスイス＞

スイスに居住する外国人は人口の約25%

特にドイツ、英国、フランス人が多くを占有

⇒スイスがEUと締結後、労働者が居住地を自由に選択可能な「人の自由移動」を認定から協定の見直しが不可欠

この移民問題とEUの単一市場両立の困難なバランスの取り方は、スイスがEUとどのような関係を維持可能かを提示

第4章 スイスの外交関係

〈第3節 スイスとウクライナ侵攻〉

ウクライナ侵攻を契機：スイスの外交の根幹の永世中立の原則は、経済制裁の参加、対ウクライナの自国製武器の再輸出容認の問題に直面

この状況下で
スイスが取るべき選択肢と、中立の意義について、
国内の識者の間では明確な意見の相違が誕生

第4章 スイスの外交関係 ＜第3節 スイスとウクライナ侵攻＞

結論として、スイスは国際法と国内法の厳格な適用を主張

この論争は、スイスの永世中立の理念的根拠と実態との乖離の顕在化、スイスが現代の複雑な国際秩序の中で小国代表でいかに安全保障を確立

そして、国際社会での役割を再定義の実行判断そして、歴史的な外交戦略の転換点の存在を示唆

今後の展望

「イスラムの受容について」

第1意見⇒「移民はイスラムの繁栄に不可欠な『宝』」

第2意見⇒「イスラム独自のルールが強固が故、外国人が不利なシステム自体が問題」

これらを踏まえて、、

⇒第1意見に賛成！